

* 2 配色における目立ちの評価

奈良女子大学 ○山崎 勝弘
酒本 順子
藤井多鶴子

衣食住の全般にわたって配色効果による心理的影響は想像以上のものがある。配色に関する研究は 1810 年に Goethe が発表したのを初めとして、Field (1845), Brücke (1866), Bezold (1876), Chevreul (1889), Ostwald (1922), Munsell (1941) 等が相ついで発表してきたが、近年に至って Moon と Spencer の協同研究の成果は全世界の注目の的となった。これらの配色論は主として色相間の問題に重点がおかれているのに対して、本研究は色相、明度、彩度の相互関係を究明すべく実験方法を工夫したものである。先ず配色の目立ち方の程度、各程度に応じた快、不快の評価を試みた。色票は改良マンセルに合わせて作った色紙を用い、標準照明 C に近い天然光を快晴午前 10 時から午後 3 時までの二階北側スリガラス越しの光を色温度計（電気試験所岡田喜義博士設計）を用いて 6000°K と 7000°K の間に相当する光の時を選んで観測を行った。配色の目立ちの程度は被験者の主観により、基準色が目立てば - 記号、資料色が目立てば + 記号を附し、評点をつけた。色の目立ちの度合は明度差彩度差の増減に正比例して変化し、特に明度差の影響は彩度差の 3~4 倍大きく、無彩色よりも有彩色の方が目立って反し、快適度は無彩色に近い方が優り、肌色を美しく見せるには服の色の明度、彩度を下げた方が良い。